

## ナイロビ：水をめぐる清潔観

著者	津田 みわ
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1997-03
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008449">http://hdl.handle.net/2344/00008449</a>

# ナイロビ

## 水をめぐる清潔観

津田みわ

空港まで迎えに来てくれたフローレンス・オモサの車が、ナイロビの中心街を抜けるとおもむろに舗装道路を離れてカワングワレに入っていったので、わたしは正直怖じ気づいてしまった。

セントラル州での2年間の調査が目的でナイロビに赴任したのは、1994年秋。ケニアに着いたら、すぐオモサ姉妹のアパートで一緒に住むことになっていた。ナイロビ大学でわたしのカウンターパートをしてくれているメアリーが長女で、フローレンスは次女。二人とも高学歴で、メアリーと同じくフローレンスも大学教員だから、ケニア女性の中ではたいへんなエリートだ。その彼女たちが、まさかカワングワレに住んでいるとは思わなかった。カワングワレは、地図ではただの空白になっている地帯。ナイロビにいくつかある大スラムのひとつなのである。

住み始めてみればフローレンスたちのアパートは、ケニアで少ないと言われる中流階級、それも上の方の人たち向けのものであった。3階建てで3棟あるアパートには全部で80世帯ほどが入居しているが、オモサ家以外にも数軒が自家用車を持っているし、顔見知りになった隣人は銀行や放送局、官公庁や貿易会社など、たいいていは堅い仕事に就いている。

だが、一步外に出れば見渡す限りの簡易住宅。

アパートを囲むはずのフェンスは壊れたままだから、子供もヤギもニワトリも自由に歩き回っている。下水はむき出しで、ごみも回収されない。水道は一応通っているし電気も電話もひかれてはいるが、圧倒的に停電と断水が多い。「引っ越した方がよくないか」など、他の日本の人たちは必ず心配してくれたし、ストレートに「どうですか、やはり不潔ですか」と訊かれたことさえあるが、外から見る限り、そんな心配が生まれるのも至極もつともな環境なのであった。

しかし、このカワングワレでの生活で、わたしは、設備の整わない環境で清潔に暮らすための方法がそれぞれの家で綿密につくられていることを日々たたき込まれることになった。このアパート暮らしが「不潔か」なんてとんでもない、むしろその反対なのである。

### オモサ家清潔要領

たとえば、断水になったとき、わが家ではトイレ・風呂場から廊下、台所にかけて20前後にもおよぶ大きささまざまな水用容器が並ぶ。台所の流しの下には50リットルの黒いタンク。調理台の下には5リットルポリタンクが10数個。食料品棚の手前に小さめの赤いバケツ。台所作業用木製椅子の上に、

青いプラスチック製洗面器。風呂場とトイレの中間の床には大きめのたらいがあり、洗面台の下には緑色の小バケツが置いてある。風呂場の中にも大小あわせて6～7個のバケツとたらいがあり、それぞれ水を張ってある。

これらの水にはそれぞれすべて区別がある。基本的に台所の中にある水が一番清潔ということになっており、以下、廊下、風呂場、トイレの順に「不潔度が増す」ことになっている。水は、より「清潔な」水を入れた容器からより「不潔な」容器へと移さねばならない。注ぐときにはもちろんある程度の距離をとる。あまり容器と容器が近すぎると「不潔な」感じがするからである。どんなに水に困っていても、台所の外でいったん手を洗うことなく台所へはいることは許されない。台所では、何にさわるより前に「清潔な」台所水でもう一度手をすすがなくては「不潔」感がぬぐえない。台所は聖域であり、最大限の注意を払って「清潔」に保たねばならない場所なのである。

この「清潔」・「不潔」感覚は、当然洗濯にもおよぶ。台所で使う布巾、台拭き、エプロン、手拭き用タオル、鍋つかみなど、すべては台所の流しか台所専用洗面器の中で、台所用石鹸を使い、台所の「清潔」水を使って洗う。洗った後は、台所用洗濯ばさみを使って台所用品専用ローブに干す。向かいのアパートのベランダとの間で何本も渡された物干しローブ群の一番左側が、その台所用品専用ローブと決まっています、向かいの家も、そこには台所のものしか干さない。

## 共有される「常識」

こうしてわが家では台所を「きれいに」保つため、細心の注意を払っているのであるが、実のところ、洗濯などに使った水を除けば、すべての水

の源はひとつである。断水中は水の出るところまでタンク持参で汲みに行くのであるが、「清潔」水と「不潔」水の区別などあるわけもない。しかし、いったん汲んで家の中に運び込み、各容器に分けたときから厳然たる区別が生まれる。これは普段でも同じである。アパート全体に流れてくる水道水は途中で分岐し、一方はそのまま各家庭の台所の流しの蛇口へ到達する。他方はいったん屋根裏のタンクに蓄えられ、風呂場、洗面台、トイレへと供給されることになる。すなわち水そのものの出所に違いはないのだが、台所に流れる水は「清潔」であり、それ以外の水は、相対的に「不潔」だということになっているのである。

どうせ飲み水は煮沸消毒するし、結局のところ同じ水なのだから、これほど厳格でなくても良いのではないか——そう訊いてみても、ルームメイトたちは「そんなことはない。叔母の家でもここと同じようにしている。近所のスラムの子供たちの家でも水だけは分けているはず。水を分けるのは常識」と確信に満ちている。それなら、と知り合いの家に呼ばれるたびに、台所をどの程度に聖域扱いしているのかをできる限り教えてもらうようにしたのだが、これまでのところどうもわが家の「常識」が共有されている場合が多い。

もちろん、「多い」といってもあくまで友人の範囲内でのことである。何しろずいぶんと生活に立ち入った話になるので、尋ねるこちらも気後れする。むしろ、かなり関係が親密でないと聴けない話だといってよい。結局、話を聞いた相手の大半が、オモサ姉妹と同じキシイ人か、ナイロビで一番人口の多いキクユ人だった、ということになってしまった。実は、この、限られたサークル内で清潔に関する「常識」が共有されているということが、一方で「あの人たちは不潔」というステレオタイプをつくっているのだが、これについては

もう少しあとで触れることにしたい。

それにしても、なぜこんなに水の「清潔」「不潔」に敏感なのであろうか。オモサ姉妹の厳格な、しかしやや科学的根拠にかける水へのこだわりを見ていると思ひ出さずにいられないのが、キシイの田舎に帰ったときの暮らしである。

ケニア西部の高地に位置する彼女たちの実家は、雨量に恵まれてはいるものの水道の設備はない。天水だけでは足りないから、水は歩いて30分ほどかかる近所の学校まで日常的に汲みに行かねばならない。運んできた水はいったん台所の大タンクにあけ、専用のひしゃくで汲み出して使う。飲料用の水は沸かしてから別の容器に取り分けておく。外出から帰った時やトイレのあとで手を洗う水は、決まった容器に入れて外のたたきに置いておく。身体を洗うときも、専用のバケツに必要なだけ水を入れて風呂場へ運ぶ。

ここで誰かがルールを破ったら一大事である。たとえば、手洗い用の容器を直接台所のタンクに浸けて水を汲まれたら、あとの水はたとえ沸かしたとしても料理用には使えない。手洗い用の容器は外に置いてあるし、農作業やトイレのあとの汚れた手で直接触るものだからだ。同じ理由で、手洗い用の容器で手を一回洗っただけではやはり炊事には十分でない。台所で食品にさわる前には、もう一度台所用に汲み分けてある水で手を濯ぐ必要がある。

農村の生活では、水を区別して手洗いを励行することは、単に必要な作業であるに過ぎない。わたしがインタビュー調査をしたセントラル州の農村でも、たとえ容器の外側は汚れていても、中にはきちんと区別して飲料用の水や雨水が入れられ、炊事に、洗濯に、掃除にと使い分けられているのが常だった(これにはもちろん個人差があって、わたしも一度だけひとつのたらいで炊事も洗濯もするおほ

あさんに会ったことがある)。未だに一軒も水道のある家に行き当たったことはないし、炊事のための台所小屋の床はほとんどの場合土がむき出しである。しかし、そんな台所小屋での炊事に「きれい」も「汚い」もないだろうと思ったら大間違い。たしかに都会のアパートの台所とでは見た目の清潔感にずいぶん差がついてしまうものだが、実は水をめぐる繊細な流儀は共有されていて、台所の清潔が守られているのである。

水が貴重である分、みなが気をつけて使い分けに注意しないと、本当におなかをこわしたりもつと深刻な病気で苦しむことになる。オモサ姉妹は、農村を出てナイロビで暮らし始めて10年ほどになるが、今も変わらず、キシイの家で培った水にまつわる「清潔」「不潔」感覚を持ち続けているようである。もちろん、手を幾度洗おうと、台所用品を別扱いしようと、雑菌が付着する可能性は決してゼロにはならない。第一、都会のアパートでは、台所の水も洗面台の水も同じパイプを流れてきたものである。ルームメイトたちも「それは分かっている。たぶん心理的なものと思う」と言うが、それでも「何となく汚い感じがしてしまう」のは本場で、「嫌なものはいや」なのだ。

## 「不潔」のステレオタイプ

この「清潔」「不潔」談義には、当然のことながら続きがあった。非常に念の入った「清潔作法」を身につけてきた頃からであろうか、すっかり「清潔」になったわたしに気を許した友人たちが、「あの人は「不潔」という話をわたしの前でもするようになったのである。やり玉にあがるのは個人でなく、きまって〇〇人といった集団である。外国人が「ケニア人」あるいは「アフリカ人」なるものを十把ひとからげに扱うのとまったく変わ

らない。まさにステレオタイプそのものなのだが、そうしてあちこちで日常的に繰り返される「不潔」評に耳を傾けるうちに、どうやらわたしの知り合いのナイロビ住人の中で（繰り返すが、圧倒的にキクユ人、キシイ人が多い）不潔と言われやすいのは、いわゆる「アジア人」（インド・パキスタン系人の総称）で、さらに海岸地方出身の人たちとルオ人も同じ汚名を着せられがちであることが分かってきた。

もちろん、ルオ人の場合には、人口的に多いから取りざたされると言う側面は無視できない。ナイロビの人口構成を見ると多い順にキクユ人(32%)、ルオ人(18%)、以下ルイヤ人、カンバ人と続き、この4大部族出身の人々だけで全体の8割を占める（ちなみにケニア人・非ケニア人をあわせた「アジア人」はキシイ人と並んで5位に食い込んでいるが、人口比では3%にしかない。海岸地方の部族出身者はさらに少数である）。だが、それだけでもなさそうだ。

第一に、評判の悪い人たちが、みな水が豊富な地方の生まれだと思われていることも気になる。どうしてその人たちを「汚い」と思うのか、理由を聞いてみるとそれこそ千差万別であるが、やはり水まわりに関するものが多い。トイレの使い方が汚いといった理由も多いが、「ひとつの水辺で炊事も洗濯も水浴びもできる感覚が嫌」という、日本人のわたしには耳が痛くなってくるような意見もよく聞こえてくる。

実は、これに加えて「不潔」と思う理由に男子割礼の習慣の有無が取りざたされることがあって、聞いているわたしはさらに冷や冷やする。ケニアには、国勢調査で定義されただけで40にのぼる部族があるが、そのうち男子割礼の習慣がないのはほんの数集団に過ぎず、件のルオはそのひとつなのである。「単なる習慣の違いではないか」と問い

返しても、「不潔になりやすいのは事実」とか「昔同室の奴は実際臭かった」などと言われてとりつくまがない（ただし、ルオ人に対する複雑な感情には、ケニア独立直後に始まった中央政界の抗争も暗い影を落としている。独立運動期にはキクユ人とルオ人の政治的連携が進み、部族の習慣の違いを乗り越えて結婚する事例が増えていたのであるが、独立後の政争で、キクユ人だった初代大統領とルオ人だった副大統領の確執が進むにつれ急速に雲行きが怪しくなった。地元の政治集会でキクユ人の聴衆を前にした大統領が、「カヘエ」——年老いているにも拘わらず割礼を受けていない男性を指す非常に侮辱的なキクユ語の呼称——という呼び名を用いて副大統領に言及し、ルオ人全体への侮蔑感情を煽っていたことは有名である）。

割礼の習慣はないし温泉では見ず知らずの人と一緒に身体を流してしまう国からきたわたしとしては、「不潔」のレッテルづけがなくなる日が来るのを持ち望まずにはいられない。今のままでは、自分の国の生活習慣を説明するのさえ何となくはばかれる雰囲気なのである。「不潔」のレッテルが主に水に対する感覚の違いに由来する限りは、ケニアの普通の家庭に当たり前のように水道が整備されるようになれば、自然とそのステレオタイプも消えていくのかもしれない。しかし、ケニアの水資源開発における次世紀に向けての目標は「あまり離れていない地点で全国民が飲料水を確保できること」であり、各戸への上水道の普及は視野に入ってもいないのが現状である。加えて、1960年代の第一複数政党制期に見られたような部族的差異を取り上げての舌戦も、92年の複数政党制化以来、与野党の幹部を中心に激しくなる一方である。ナイロビのわが友人たちが、水にからんだ「不潔」のステレオタイプを忘れてしまうのは、残念ながらまだ当分先のことになりそうである。

（つだ・みわ／地域研究部）